慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	二〇一六年度修士論文要旨；二〇一六年度卒業論文題目
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2017
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.87, No.1/2 (2017. 7) ,p.205(205)- 222(222)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20170700-0205

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

二〇一六年度修士論文要旨

〔日本史学専攻〕

戦国期甲斐武田氏と商人

竹内　慎一郎

戦国期甲斐武田氏領国において活動した商人としては、これまで御蔵前衆（年貢を集め各地の蔵へ運び、その蔵を管理したり、年貢品を市場で換金するなどして武田氏の財政を支えたといわれる代官衆）の中にいたとされる商人が主に取り上げられてきた。しかし、実のところ彼らを商人としてよいのかどうかは史料的根拠に乏しく、再考の余地がある。また、当該期の「商人」を考えるためには「御蔵前衆中の商人」のような特定の商人のみでなく、より多くの商人を検討する必要や、信玄期・勝頼期を分けて考察し、商人の活動、大名と彼らの関わり方にどのような差異があったのかを明らかにする必要があると思われる。

そこで、本論では改めて武田氏領国で活動した商人について、幅広く史料を考察しその実態に迫るとともに、「御蔵前衆中の商人」への再検討や、信玄期・勝頼期それぞれの事例の検証をすることで、戦国期における商人像の一端を明らかにすることを目指した。

まず第一章では武田氏領国の甲斐・信濃・駿河において活動した商人を概観し、商人の実像を考察した。その結果、一口に商人といっても実に様々なタイプの者が存在しており、甲斐だけでも町中で常設の店舗を構えて商売した者、町中で実際に商売をすることはなかったものの、武田氏に物資調達の奉公をしたり、居住する地域のまとめ役として活動した者、集団として商売活動のみならず武田氏への軍事的奉公など多様な活動をした九一色衆のような辺境の者など、多くの事例がみられた。

第二章では、先行研究で重要視されてきた「御蔵前衆中の商人」について再検討を加えた。これまで彼らは武田氏と最も関わりの深かった商人であったとされてきたが、他の商人関連文書などと比較検討した結果、御蔵前衆として役所管理などの代官的活動や、広く実務を担う武田被官としての活動はみられたものの、そのような活動の傍ら大規模な商業活動をしていたとは考えられないと結論付け、従来の「御蔵前衆中の商人」が武田氏にとって最も重要な商人であったとする見解を否定した。

最後に第三章では、信玄期・勝頼期それぞれの商人の活動・大名と商人との関わり方を取り上げ、武田氏の統治の中で商人がどのような役割を果たしていたのかを考察した。その結果、信玄期には多くの商人に特権が与えられ、勝頼期ではその素地を基に、これまでの商人や新たな商人へ特権の付与がより積極的に行われ、市立ても増加し商業の振興・経済的発展が図られていたことが明らかになった。また、天正年間には国境地帯で

武田領国の駿府商人が敵領国の商人から武器の買い付けを命じられるなど、武田氏にとっての重要性が増していった様子も窺えた。

以上の考察から、「御蔵前衆中の商人」ではない、その他の多様な商人が武田氏と関わって存在していたことが明らかとなった。彼らは種々の奉公によって、武田氏の領国経営を支えていたのである。

中近世移行期における町方の形成と身分構造
―駿府城下町と毛皮町から―

野村　駿介

近年の身分制研究では城下町に居住する多様な身分集団が結ぶ重層的な関係性が明らかにされてきている。その一方で、穢多身分については、そうした側面は看過されがちであり、依然として孤立した身分集団という評価に留まっているともいえる。本論文では、駿府城下町を構成する町のひとつであった毛皮町を対象に、穢多身分と町方とが結ぶ関係性を明らかにするとともに、中世から近世にかけて駿府の地域社会に形成されていく共同体意識や身分構造の実態にも迫ることを試みた。

第一章では、毛皮町の穢多としての活動と駿府周辺地域における被差別民をめぐる政治構造を検討した。毛皮町の町頭は、穢多頭として近隣の幕府・旗本領に居住する穢多や非人に対して人足役などを課すとともに、独自の仕置を行う権利も認められていた。こうした毛皮町のもつ権益の範囲は、村方を支配する駿府代官の支配地域と重なる形で展開しており、幕府権力による被差別身分支配の体系化は、近世後期に入ってようやく本格化していったと結論付けた。

第二章では、毛皮町と駿府の町人社会との関わりを駿府に残された町政記録を用いて具体的に検討した。毛皮町は狭義の町共同体である「惣町」からは除外される地域であったが、人口調査や長崎貿易利益銀の分配、そして宗門改めなど幕府支配の枠組のなかで駿府という「町」の存在が規定される場合や、困窮に際して救済を申請するといった駿府が「町」として幕府に働きかける場合などにおいて、穢多という身分でありながらも、駿府の町方の一員として受け入れられていたことを明らかにした。

第三章では、前章までに検討してきた毛皮町と町方との特殊な関係がいかにして形成されたのか、中世段階まで遡り、その歴史的背景を考察した。戦国期に駿府で活動をはじめた穢多たちは、寄親寄子制度による支配を受けていた。しかし徳川家康による城下町の本格的な整備とともに中世以来の支配構造は解体され、穢多たちは次第に形成されていく町人社会の中へと組み込まれていったのである。中世以来、毛皮町と共に駿府の辿ってきた歴史は由緒書という形で町人層に広く共有され、活用されていく。町人社会にとって、由緒とは共同体としての連帯感の軸に位置づけられるものでもあった。そしてそれこそが毛

皮町が町方に受け入れられる根拠のひとつにもなっていったことを論じた。

以上の検討により、毛皮町の生業と駿府周辺地域の被差別民支配の実態が明らかになったとともに、穢多という身分が決してひとつの完結した身分集団ではなく、町人社会とも多様な関係を結び、共同体を形成していたことが明らかになったといえる。

戦時下における東井義雄の同時代的評価
―『学童の臣民感覚』の出版過程を通じて―

久光　翔

修士論文では、東井義雄（一九一二～一九九一年）という小学校教師と彼の著書『学童の臣民感覚』（日本放送出版協会、一九四四年）の出版過程を通じて、戦時下における東井の同時代的評価について検討を加えた。東井については、戦後の代表的著作である『村を育てる学力』（明治図書、一九五七年）の影響もあり、教育学の分野からはすでに膨大な先行研究の蓄積がある。思想史の側面からも、思想の科学研究会による転向研究の素材として、戦後の早い時期から取りあげられてきた。

しかしながら、兵庫県の一小学校教師に過ぎない東井がなぜ、総合雑誌『文芸春秋』の一九四三年五月号に論稿「学童の臣民感覚」を寄稿するに至り、『学童の臣民感覚』の出版へと結実し得たのか。また寄稿・出版過程において、東井の周囲にどのような人々・団体が関わっていたのかについてはこれまで明らかにされてこなかった。本稿では、東井の教育実践を評価した人々による二次史料や出版社から東井に宛てられた書簡を用いて、その一端を明らかにした。

出版過程については以下の点が明らかになった。すなわち、東井が教育関係者以外の領域で紹介されるようになった端緒は、日本浪漫派の代表人物であった浅野晃（一九〇一～一九九〇年）が『国史の回想』（小学館、一九四一年）を初めとする自身の著作や論稿で、東井指導により作成された綴方、「僕等の二千六百年史」を取りあげ高い評価を加えたことにある。その後『国史の回想』を通じて、当時原理主義的な日本主義運動を展開していた日本学生協会の関係者が、機関紙『新指導者』上で東井の実践に言及し、その一人である房内幸成（一九〇七～一九八六年）が文芸春秋社に東井を紹介することで、「学童の臣民感覚」の寄稿が実現した。浅野や日本学生協会の関係者らは、自らの思想、とりわけそれぞれの歴史観に合致する側面を東井の教育実践に見出し、言及したのである。なお著作の出版過程においては、出版権の譲渡を巡る出版社間の「抗争」や日本出版会からの原稿再編集依頼もあり、予定日は大幅に遅れたものの、最終的には出版へと結実した。

以上の出版過程を通じて再考される戦時下における東井の同時代的評価として、「僕等の二千六百年史」それ自体の同時代的重要性と、『学童の臣民感覚』が東井の戦時下教育実践にお

ける原理主義的帰結としての性格を有する点を指摘した。さらに戦後への連続性という観点からは、同時代的評価においてほとんど評価を加えられなかった側面こそ戦後へと「接続」したのであり、それが東井の代表的な教育思想とされる、「死」を起点とする「いのちの思想」であったと結論付けた。一方で、東井の戦時下における実践基盤の経済・産業構造等についてはほとんど触れることができず、東井を評価した人々や彼らが所属していた団体の位置付けも必ずしも明確にできなかったため、この点は今後の課題としたい。

〔東洋史専攻〕

一七世紀オスマン帝国における海軍組織
―提督の職務とキャリア・パターンを中心に―

相磯　尚子

オスマン海軍研究は、セリム三世（在位一七八九―一八〇七）による海軍近代化を境として研究される傾向にあり、特に近代化以前のオスマン海軍については最も研究の進んでいる一六世紀を前提として、創設期から一八世紀末までが一概に語られてしまう傾向にあった。本論文は、官僚による政治主導が顕著になった一七世紀に注目し、これまで不明瞭なままであった歴代の提督（kapudân-ı deryâ）を具体的に明らかにするとともに、その職務とキャリア・パターンを分析することを通じて、オスマン帝国の支配組織における提督の位置づけを試みたものである。

提督はオスマン海軍の統括者であると同時に、エーゲ海の島嶼部と沿岸部を領域とする島嶼州の州総督を兼任していた。イスタンブルの帝国造船所に居住し、その職務はオスマン海軍の人事、船舶の手配や維持などを統括することであったが、インド洋やドナウ河などには指令系統を別にする艦隊が設置されていることからも、提督は事実上、地中海および黒海にまつわる海事を管轄する責任者であったと言える。

メフメト三世（在位一五九五―一六〇三年）からメフメト四世（在位一六四八―一六八七年）の時期に、五六代、四八人の提督が存在した。その就任の多くは、一〇月末から三月にかけての冬季に行われており、夏季に行う遠征などの海洋活動を念頭に人事異動が行われていたとみられる。地中海はその気候上の理由によって、冬季の海洋活動が困難であったためである。一七世紀初頭から次第に宰相の地位を得るものが増え、一七世紀中葉以降は提督が宰相位を持つことが慣例化した。しかし、実際に艦隊を率いるなどの海上戦闘の経験をもつ海洋経験者に対しては、宰相位が与えられることはなかった。同時代には提督の理想像として海洋経験者が挙げられているにもかかわらず、海洋経験者であると考えられる島嶼州に属する県知事と造船所長官を合わせても、五六代のうちわずか五代にとどまった。提督就任者をそのキャリアによって分類すると、宮廷官職経験者

（三〇代、二六名）、宮廷官職の経験のない州総督経験者（一二代、九名）、宮廷官職も州総督も経験のない県知事経験者（五代、四名）、造船所長官（二代、二名）、不明（七名）となる。このうち、提督の大半を占める宮廷官職経験者には、宮廷官職から直接提督に任命されるものと、各地の州総督のキャリアを積んでから提督となる者がみられた。提督後のキャリアとしては、大宰相や大宰相代理となる例が比較的多くみられる。また、提督任期中に大宰相代理を務める者も存在した。したがって、提督という地位は、オスマン帝国の支配組織において非常に高い地位であるとみなされていたと同時に、官職経験者にとっては大宰相を頂点とするキャリアの一つとしての性質を持ち合わせていたと言える。

鯀神話の性格に関する一考察

呉　昊陽

鯀神話は有名な大禹治水神話の前章として、中国洪水神話の重要な一環を占めているはずだが、史料の欠如のため、長らく重視されていない。近年、自然科学の発展を背景にし、中国の学術界は鯀禹治水神話を再び拾ってきた。しかし、神話ではなく、史実として扱い始めているわけである。そのまま治水神話を現実に起こった事件とするのは不適切だと思われるが、神話は伝えられていた時期の何かの現実を反映しているに違いない。その何かを究明するのが本論の目的である。

先行研究を見ると、中国大陸地方の論文数は圧倒的に多い。もちろん付会も最も多い。日本の場合、一九九〇年に刊行された鉄井慶紀氏の論文集以降、鯀を研究する学者はいなくなってしまった。先行研究はほとんど鯀の原型、鯀が殺された理由と鯀が化した動物に集中し、ごく一部は地理の角度から論述を展開する。

本論文は文字学と先秦時代の伝世文献に対する分析を出発点とし、鯀神話に含まれている中国古代思想を探ってみた。全文は序論・本文・結論三部分に分けられ、本文はまた三章に分けられる。

序論では鯀神話に関する学界の背景及び先行研究をまとめ、本論文の概況を述べた。

第一章は甲骨文・金文・楚文字及び伝統の説文学という文字学の角度から「鯀」について考察をした。原始的な鯀神話は戦国以前に既に存在していたかもしれないが、整った鯀神話は現時点では戦国時代の神話だと言わざるを得まい。今の学界に採用されている研究法は付会に過ぎないと思われる。

第二章はまず「殛」の字義を明らかにして、鯀が受けた懲罰は流罪か、それとも死刑かを究明して、死亡説を賛成した。次に鯀の死亡を記した法儒二家の文献を比較し、そのなかに先秦時代の兵刑未分思想を反映していると考える。

第三章は鯀の死に場所羽山を探った。羽山の「羽」は鳥の羽を指すのではなく、五音の羽音であり、羽山は羽音がする山だ

と思われる。

第四章は本論文の結論として、論文全体をまとめてから、言及していない話題を指摘し、鯀神話に関する今後の研究を展開するにはどうすべきかについて私見を述べた。

一九世紀前半イスタンブルにおけるメヴレヴィー教団
―『デフテリ・デルヴィシャーン』にみるイェニカプ修道場―

廣瀬　瑛

本論文では、一九世紀前半を中心にイェニカプ修道場のシェイフが書き残した日々の記録である『デフテリ・デルヴィシャーン』の分析により、修道場における活動の実態を検討した。イェニカプ修道場では一二代シェイフのエブーベキル以降、一九二五年に修道場が閉鎖されるまで彼の子孫によってシェイフ位が継承された。『デフテリ・デルヴィシャーン』は一三代のアリー・ヌトキーから最後のシェイフとなった一九代のメフメット・アブデュルバーキーまでのシャイフたちによって書かれた史料であるが、筆者によってその記録の性質は異なり、一九世紀前半の記録が質量ともに最も充実している。その内容は修道場の内部で生活したメヴレヴィー教団員のデルヴィーシュたちel-Mevlevi と、修道場の外部より活動の支援を行った平信徒たちに関係するものに大別することができる。

前者に関しては、メヴレヴィー教団に特徴的な入門の儀礼であるチレについて多くの情報が残されており、マトバーフと呼ばれる部屋で同教団の習慣を学んだ上で、ムカーベレの練習へと段階を踏んで修行を行っていた様子が観察される。また修行を終えたデルヴィーシュは、修道場で役職に任命されるほかに、各地の修道場を行き来することや、修道場の外に家庭を持って生活することなど、多様な生活を送っていた事実も明らかである。

後者に関しては、教団からシッケやアラクイェといった帽子を与えることで、平信徒としての教団とのつながりを確かめる儀式についての記録が多い。それは帽子を授与する儀礼の重要性を示す一方で、平信徒の年齢や職業が示されていることから親子や同職といったつながりを通して平信徒となった様子が観察される。そのような平信徒は修道場に対して、金銭やタバコなどの嗜好品を始めとして様々な寄付を行っていた。その中でも重要であるのがスルタンや政府の高官の存在で、彼らが様々な形で便宜を図り、また個人的な関係をもシェイフと築いていたことが確認できる。

そして両者に共通することとして、そのような教団の活動に部分的ながら女性も参加していたという事実が挙げられる。その他にも史料には、火事や地震などの災害や、珍しい天体現象、当時のエジプト情勢など、シェイフが個人的に関心を持っていたと推測される記録も数多く残されている。

これまでメヴレヴィー教団の修道場に関しては、歴代シェイ

フの伝記的な側面からの研究が多かったが、このように修道場で記録された一種の日記を使用することで、デルヴィーシュや平信徒たちの活動を具体的に明らかにすることができた。このような成果を元にした、メヴレヴィー教団における規則と慣習についての再検討は今後の課題である。

『ドン・キホーテ』におけるモーロとモリスコ

渡辺　章太

グローバリズムが叫ばれ、多様性が常に求められるのが世界的潮流となると思われていたが、近年、各地ではその流れに逆行するかのように排外主義の進展が見受けられる。アメリカにトランプ大統領が誕生したのを皮切りに、ヨーロッパでも右派陣営が人々の支持を受け、移民や障害者、そして同性愛者などのいわゆるマイノリティと呼ばれる人々が「他者」としてマジョリティからのまなざしを強く浴びるようになった。このようなマイノリティを「他者」とするまなざしは過去にも存在しており、現在のような世界の潮流が過去の時代へと逆行していると捉えられる時代だからこそ、その過去におけるまなざしについて再考し、現在を見つめ直す必要があると思われる。

一六世紀後半から一七世紀にかけて、スペインの国内にはレコンキスタによってマジョリティとなったスペイン人と、マイノリティとして「他者化」され追放されていくムスリムのモーロ、さらには「隠れムスリム」であるモリスコが存在した。この共同体における人々の「他者」に対するまなざしがいかなるものだったのかについて考察するために、本論文では、当時のスペインで多く読まれ、さらには人形劇などによって多数存在した非識字者たちにもその内容が共有されたセルバンテスの『ドン・キホーテ』に的を絞り、スペインのマジョリティの意識の分析を試みた。

活版印刷の普及によって書物は当時の人々への情報伝達の最も有力なツールとなっていたが、著者セルバンテスのレパントの海戦、アルジェリアでの捕虜生活といったムスリムとの直接的な接触の経験が付与されたことで、『ドン・キホーテ』におけるモーロとモリスコのイメージは、マジョリティであったスペイン国民に確かな信憑性を持って伝えられ、受容されたといえる。さらに、アラゴン王国とカスティーリャ王国の複合王政国家であったスペインは、国民の統一的なアイデンティティの不足に悩まされていた。そこで彼らの統合原理となったのがアラゴン王国にもカスティーリャ王国にも共通したカトリックという宗教であった。こうして自国のカトリック意識を高めるために、「都合のよい他者」とされたのがイスラームであり、それを信仰するモーロとモリスコであった。マイノリティの「他者化」によるマジョリティのアイデンティティ形成と優越意識を検討し、再確認する当該作業は、一九七〇年代にエドワード・サイードが提唱したオリエンタリズムと同様の構造を持つといえる。その構造を『ドン・キホーテ』の再考察を通じて具

体的に明示することは、「現在」を見直す際に必要なまなざしの獲得へと繋がっているのである。

〔西洋史学専攻〕

一八世紀から一九世紀初頭のロシア都市部における農民
―モスクワを中心に―

ウェルズ　ヤン

本研究の目的は経済活動を農民の活動拠点である農村から都市へと広げた、農業以外の経済部門において生活を成り立たせていた農民の在り方を描くことである。本論文では一八世紀から一九世紀前半という農奴制の枠組みの中で生活していた農民が、都市という様々な身分の人間が集まる空間の中に存在していたことを確認することからはじめ、彼らがいかにして農奴制の縛りを潜り抜けて活動していたのかを、明らかにすることを試みている。これらの都市で働く農民は村外就労者として研究されてきたが、その研究の対象の時期は、多くが一九世紀後半以降に限られ、一八世紀から一九世紀前半にかけての農民の都市における経済活動に関する研究は一九八〇年代以降進んでいないのが現状である。一九八〇年代後半のペレストロイカまで、ソ連時代の歴史学は冷戦構造と社会主義体制のもとで研究の枠組みが決められていた。その枠組みの中では「支配される対象としての農民」像が研究の焦点になり、「生活する農民」像に対する関心が薄かった。一方で近年のロシア史研究では、農民の家族史や女性史、ミクロ的な事例研究によって帝政ロシアにおける農民の在り方を捉えなおす動きが活発化している。しかし、これらの研究はやはり一九世紀後半以降を焦点として扱っているものがほとんどであり、一八世紀から農奴解放前の一九世紀前半を扱った研究は依然として不足している。本論文では一八世紀から一九世紀前半にかけて、都市において農民の「経済活動を可能とする余地」の枠組みの変化を追っている。都市における商業や手工業の在り方を規定していたギルド制度の変化に基づいて、一七五〇年代から一八二四年までの時期を三つに分け、時代の変化に伴う農民の都市における権利の推移を明らかにしている。

本論文では都市に進出する農民が、既存の商人身分を脅かす存在として問題とされた一七五〇年代から、農民に商人とほぼ同等の権利を認めた革命前の最後の大きなギルド改革であった一八二四年の大蔵大臣カンクリンのギルド改革までを調査対象時期としている。一八世紀から一九世紀前半にかけて一〇回行われた人頭調査資料を基に、モスクワにおいて商人として登録されている農民出身者数の変化を追った。彼らは農民の身分を捨て、ギルド制度を利用し、都市参事会への登録によって商人身分を獲得した者たちである。彼らのような商人たちの登録者数は一七八一年を境に急増し、一八一一年から三三年の間で急激に減少した。この数字の上下はギルド制の変化に伴うことが

考えられる。

ロシアのギルド制は一七七五年から一八二四年にかけて都市における農民の経済活動を許容する方向へと向かっていた。これは、都市において農民の与える経済的な影響力が無視できないものになっていったことに起因する。農民に関するモスクワ警察署の報告書や、都市参事会から法務省へ向けられた要請などを見てみると都市経済の様々な場面に農民が存在していることが分かる。その中では一八世紀後半以降商業や手工業で力を持ってきた農民と、既存の商人階級の在り方や利権を保護しようとする商人の対立が特に強調されている。国家は一七七五年から一八二四年にかけて商人階級の権益を守りつつ、農民を商人階級の中に引き入れようと矛盾を抱えながら、ギルド制度と都市における農民身分の位置づけを見直し続けた。

上記のように一八世紀から一九世紀前半にかけての都市における農民を取り巻く環境の在り方は三つの時期に分けられる。まず、農民が都市において働くことを原則的に違法としていた一七七五年までの期間、次に農民に経済的な基準でもってギルドに登録することを認めた一七七五年から一八二四年までのギルド制と農民の都市での在り方の矛盾が高まっていく期間、そして最後に農民に身分を変えることなしに都市で商業や手工業に携わることを認めた一八二四年の三つの時期である。さらに、本論文で取り上げられている報告書類を通して知ることができるように、農民は都市において商人や労働力として幅広く浸透し、国家にとっても既存の商人階級にとっても無視できないものとなっていった。結果として、都市における農民の権利が拡充されていったのである。以上のように、ロシアの都市における身分と職業の制度的な矛盾は、原則的には封建制の外観を持ちながらも、実質的には一八世紀後半から一九世紀の初めを通して解消されていったのである。

〔民族学考古学専攻〕

オホーツク文化におけるブタの飼育・利用

服部　太一

オホーツク文化は、五世紀から一三世紀頃にかけオホーツク海南岸域に栄えた文化である。その担い手達の動物資源利用は、海産資源に強く依存する一方、イヌ・ブタを飼育したことにも特徴付けられると言われている。しかしながら、「カラフトブタ」と呼ばれる同文化のイノシシ類については、飼育・利用法はおろか、その形態的特徴すら、十分に把握されてはいない。そこで本研究では、多角的な分析を通して、それらの解明を試みた。

オホーツク文化における家畜飼育の時期差・地域差については、つとに指摘されてもいたが、サハリンを含めその差異が検討されることは稀であった。そこで本研究では、まず、未報告であった東北大学所蔵のサハリン資料（伊東信雄コレクショ

ン）の内容も明らかにした上で、ブタの出土量の時期差・地域差を検討し、以下三点を確認した。

(1)ブタはオホーツク海南岸域の先史諸文化にあって、オホーツク文化でのみ飼育されていた。

(2)ブタは、大陸との関係が希薄になる後期（八～九世紀）に出土量や哺乳類に占める割合が最大となる。

(3)道東部では家畜飼育が盛んでなかったが、サハリンや道北部ではブタを含めた家畜が多く飼育されていた。

次に、出土量が分けても際立つ礼文島の遺跡群（浜中2遺跡・香深井1遺跡）を対象に、計測値による形態学的検討をおこない、以下二点を指摘した。

(1)導入当初から、カラフトブタは家畜化が進んでいた。

(2)前期（五～六世紀）は中期（七～八世紀）以降とは大きさが明らかに異なり、飼育・利用法になんらかの差異があったと思われる。

加えて、この地域におけるブタの飼育法を探るため、エナメル質減形成の分析と、安定同位体による食性分析も行い、以下二点も明らかとした。

(1)飼育環境はあまり良好でなく、特に後期に悪化した。

(2)飼料が季節変化するため、放し飼いであった可能性が高い。

最後に、齢構成・カットマーク・出土状況から、利用法について検討し、以下三点を指摘した。

(1)ブタの利用時期は冬に集中する。

(2)後・晩期は、中期より若い個体が利用されやすい。

(3)人間による利用を疑う余地はなく、食肉のみならず、毛皮や脂肪も利用された可能性が高い。

従来、オホーツク文化において、ブタは非常食とすることを目的に飼育されたと考えられてきた。もとより、その出土量に鑑みればブタが主たる食料資源であったとは考え難い。しかしながら、先に述べた通り、ブタは主として冬季に利用されていたことが確認された。冬季は漁撈活動の盛んな時期に当たり、食糧が欠乏することは想定し難い。こうした観点に立つ時、今後は、毛皮の利用や、儀礼や祭礼でふるまうことを目的に飼育された可能性も考慮する必要があろう。

北辛・大汶口文化と仰韶文化における鼎の編年
―新石器時代中・晩期における東夷と中原の関係の再検討に向けて―

王　心歌

古代中国にとって、非常に重要な礼器であった鼎に関し、従来の研究は、新石器時代に東夷人が発展させたと考える傾向があった。また近年、東夷文化の遺跡の発掘と研究が進み、「華夷思想」や「中原中心主義」が強い歴史観の中で、新石器時代中晩期に鼎が中原に普及し、青銅器時代以後、鼎の重要な礼器としての地位が確立することから、古代中国を研究する際に、東夷の政治的役割を改めて評価する動きがみられる。本論文は、

このような背景の下で、東夷と中原の鼎編年を組織して考察し、その関係を探り、古代国家の成立過程における、中原地域と東夷地域の具体的な関係に迫った。

第一章は、文献史学と考古学の二つの観点から、東夷と中原との関係の従来の認識をまとめてみた。周王朝による征夷戦争の結果、東夷が敗者として、長く差別され続けてきたが、実際には、新石器時代中晩期から殷にかけて、東夷から西に向けた、つまり中原への影響と進出が無視できない根拠を、時空列で文献史学と考古学の両方から論じた。

第二章は、鼎の研究史に関する内容である。東夷式の鼎の誕生については、裴李岡文化に影響されたとする説と、東夷自身の後李文化の乳釘足器から発展してきたとする説がある。また、大汶口文化中期以降、東夷人の西進によって、東夷式の鼎が中原に伝わった、と多くの研究者が認識している。ただし、これまでの議論では、鼎の器種分類の混乱、東夷の中の地域差が明確にされていないこと、東夷と中原の鼎の一括的な編年研究の不在など、三つの問題点が存在する。

第三章では、第二章で気づいた三つの問題点を踏まえ、鼎の形態的特徴を形式分類の基準にし、詳しい分類定義を行った上で、各遺跡の報告書を参照し、七〇〇〇～四五〇〇B.P. の間、東夷の北辛文化・大汶口文化、中原の仰韶文化を対象に、特に大汶口文化については地域別に細分し、編年図を作成した。

第四・五章は、第三章の分析を考察し、鼎で見られる東夷と中原、そして東夷と裴李岡文化との関係について、以下の四つの結論を得た。①従来、東夷の在地型器種と思われていた釜形鼎Ⅰは、中原においても、東夷とほぼ同時期から出現した。胴部と底部の造形から考えれば、むしろ、同器種が東夷において定着するまでの経緯に、中原の影響があった可能性がある。②釜形鼎Ⅲは、釜形鼎Ⅰのプロトタイプではない。③胴部が浅く緩やかな丸底か、平底が主流である裴李岡文化と比べ、鼎が北辛文化中期から出現した後、晩期まで胴部が深く尖る丸底のものが多く、支脚に対応しやすいような造形である。したがって、東夷式の鼎は、罐形鼎以外に、裴李岡文化から直接影響を受けた可能性は低い。在地型の器種が支脚と一体化し、鼎が形成された。④大汶口文化中期以降、東夷の鼎は地域を超えていくつかの特徴が共有され、標準化される傾向があるが、それらの特徴は中原にあまり見られない。東夷文化の積極的な西進という定説に対し、鼎はあまりその証拠を示していないことが明らかになった。

本論文では、これまでの鼎に基づく東夷と中原との関係に関する定説に疑問を投げかけ、新たな観点から検討を加えることができた。

西アジア出土の「単開口建築模型」の系統関係
―形態的差異と時空間的分布に基づいて―

髙田　優衣

本研究は「建築模型」のうち、「単開口建築模型」にみられる系統関係を形態的差異と時空間的分布から明らかにするものである。建築模型とは、建築構造的要素をもつ遺物群の総称である。西アジアとその周辺地域に紀元前三〇〇〇年紀から紀元前五〇〇年頃まで出現する遺物であり、時空間共に広く分布する。

研究史において、建築模型に対する解釈は、実在した神殿の写実的模倣であるとするか、宗教的な意味合いを持つ建築的空間のレプリカであるかに大きく分かれる。しかし、定義や名称に曖昧さが見られ、体系的な研究が行われているとは言いがたく、また形態的な視点からの研究が乏しい状態にある。

本研究では建築模型の定義を「建築物、または建築的空間の模倣を目的に作られた、建築構造的な形態要素の量の多少、質を問わずに有する土製・石製の非実用的な三次元構造の遺物」とし、これに該当する資料を対象に分類を行った。その後、分類を元に系統関係の存在を確認し、考察を行った。

分類は、第一項目として開口部の差異、第二項目として外形の差異を基準とした。第一項目には、開口部を複数持つ「複開口建築模型」、開口部を一つのみ持つ「単開口建築模型」、上面を持たず吹き抜け状の開口部を持つ「上部開放建築模型」の三形式が設定された。本稿では、このうち単開口建築模型を中心に系統関係の考察を行った。

単開口建築模型の第二項目には、直方体状の本体に単純な開口部を持つ「直方体状単開口建築模型」、正面部と背面部の形状が異なり、かつ正面部が強調された「ファサード状単開口建築模型」、上が閉じた円柱状の本体の側面に単純な開口部を持つ「円柱状単開口建築模型」の三系統が見られた。これらの系統は出現の時空間的分布に偏りが見られ、直方体状単開口建築模型とファサード状単開口建築模型はメソポタミアからシリア、南レヴァントへ続く系統、円柱状単開口建築模型は地中海周辺を中心に展開した系統であることが分かった。また、これらの系統は紀元前一五〇〇年～紀元前一〇〇〇年頃、後期青銅器時代から鉄器時代にかけて南レヴァントに集中するが、紀元前一〇〇〇年以降は南レヴァントでは消失し、周辺地域では継続して出現する。

また、一部に他系統の属性を有する「中間形態」が見られた。中間形態は前述の建築模型が集中する時期・地域にのみ出現することから、各系統が南レヴァントで接触したと考えられる。異なる由来を持つ系統が接触、共存した背景には、建築模型が持つ「神性の居る空間」という機能のみが受け入れられたためと考えられる。特定の宗教の、特定の儀礼に用いられた遺物でも、その信仰を伝播させるための指標でもなく、単開口建築模

型は神性を示すという信仰の実施の一例であり、異なる宗教的背景であっても、このような受容姿勢があったからこそ、系統が成立したと推察できる。

ハランの神シンの性格の変遷について
―紀元前二千年紀から紀元前一千年紀にかけて―

江原　聡子

北メソポタミアの都市ハランは、紀元前三千年期末より、モンゴルに滅ぼされる紀元一三世紀まで三千年以上の歴史を持つ。筆者はすでに卒業論文において、ハランは三千年の間、月神シンを奉ずる都市であったと結論づけた。本論ではその議論を一歩進め、三千年間ハランの主神であり続けたシンの元来の性格がいかなるものであったかを探り出す試みを行った。その際、新バビロニア時代、新アッシリア時代のステラを主たる資料とし、その後、紀元前二千年紀の粘土板資料と比較することにした。時代を遡る形で論じたのは、情報の多い時代から遡ることで、ハランのシン崇拝の原初の形態を探るためである。

最後の新バビロニア王ナボニドス（前六世紀）は、それまでのバビロニア王家とは出自の異なるハラン出身のアラム人であったが、彼の六点の石碑の図像と銘文を分析した結果、銘文には複数の神々が月神に従う内容が記され、図像においては月神のシンボルを最も尊重する様子が刻まれている。ナボニドスは故郷の神シンを主神とした新たな国造りを意図していたようである。彼が銘文で示すシンは、多神教の万神殿（パンテオン）の頂点に君臨する神であった。しかし、図像ではシンが圧倒的に優位に描かれることから、元来のシンはかなり排他的な神と理解されていた可能性を指摘した。

新アッシリア時代（前九世紀―前七世紀）には、ハラン周辺を含むシリア＝パレスチナ地域はアラム人の領域であり、ハランの月神シンは広く崇拝されていた。当時、アラム人を取り込んでシリアからエジプトまでの西方支配を企図していた新アッシリア帝国は、シリア＝パレスチナ地域におけるハランのシンの人気を利用したようである。この時代から知られる境界保証のステラには、ハランのシンのシンボルである三日月と銘文が刻まれている。本論では、この時代でも銘文にはアッシリアの複数の神々が境界保証の神として登場するのに対し、図像には三日月のみが刻まれていることを示した。アッシリア人は多神教的であり、西方支配の手段としてシンを利用したのに対し、アラム人はハランのシンをかなり一神教的な性格の強い神として奉じていたことが読み取れる。すなわち、新アッシリアの支配下に入ったアラム人は、公的には多神教の神々を受け入れざるを得なくなったが、彼等自身は基本的にハランのシンのみを礼拝していたのであろう。

以上のことから、元来ハランのシンは一神教的で契約保証を司る神であったと思われる。紀元前二千年紀に初めて資料に現れるハランのシンは、同盟保証の神であった。ハランのシンの

起源と思われるアムル人の信仰を鑑みると、月神シンとは元来創造神で、質朴な一神教的性格の強い神であり、契約保証の性格は、その権威に付随して生じたものであったと考えられる。

そのようなシンの圧倒的に優位な性格が、都市ハランを三千年支え続けたと思われる。

モノに読み解く「生きられた」植民地的状況の歴史人類学的研究

―博物館に所蔵されるニューアイルランドのマランガン彫像を対象に―

臺　浩亮

「収集と展示のポリティクス」がクリフォードによって議論されたのを契機に、博物館所蔵品が誰に／どこに所属するものなのかが問われるようになり、所蔵品が収集された歴史的文脈への関心が急速に高まった。歴史人類学では博物館所蔵品に焦点を当て、現地島民による宗主国のモノの流用から、現地島民を描き出す試みがなされている。また「収集の歴史」研究では来訪者が記した書簡類や撮影された写真類をもとに、来訪者と現地島民の交渉を読み解く研究が欧米を中心として盛んに議論されている。一方で、従来の研究では、主題となる収集者は宗主国出身者が多く、宗主国による植民地経営によって持ち込まれたモノやそれによって生じた社会変化、宗主国本国での機運（総称して植民地的状況とする）を収集者たちが意図的に「流用」したのかどうかはほとんど議論されてこなかった。また、収集の背景にある植民地的状況のなかで、現地島民が植民地的状況をどのように「流用」し、生きていたのかを論じた研究は殆ど成されていない。

筆者は、ニューアイルランドで開催される葬送儀礼マランガンに焦点を当て、修士論文では①慶應大所蔵のマランガン彫像の形態分析・類例検索と文献に基づく日本人収集者小嶺の収集活動の検討、②彫像の意匠の時空間分布図の作成による分布傾向の抽出と検討を行った。

小嶺が収集した造形物の中には、マランガン儀礼で使用される彫像が二体含まれていた。そこで筆者はまず、慶應大資料の詳細な形態観察と他機関が所蔵するマランガン彫像との比較解析を通じて、慶應大資料の類例資料を抽出し、収集地域を推定することを試みた。結果、慶應大資料の類例資料が天理参考館とシカゴ・フィールド博物館に所蔵されること、慶應大資料はそれぞれニューアイルランド島北部と南部で収集された可能性が高いことを確認した。さらに、慶應大が所蔵するマランガン彫像とその類例資料の比較解析の結果を出発点にして、小嶺磯吉がドイツ植民地政府のルルアイ任命制度を利用して、現地島民との関係構築を行っていたこと、植民地化の過程で需要が増大した造船業に参画し、自身の収集活動で船舶を利用していたこと、欧米の博物館で生じていた造形物獲得の機運を利用して利益を上げていたことを指摘した。

博物館に所蔵される彫像を中心に、用いられる意匠の整理とその時空間分布の検討を行ったところ、多くの意匠は当初、特定の地域に集中して使用されていたが、二〇世紀に入ると、ニューアイルランドの各地で使用されるようになることが判明した。民族誌の情報などから、地理的言語的制約からニューアイルランドは本格的な植民地化以前においては、村落や言語地域を越える人々の移動は極めて限定的であったことが判明している。植民地経営が本格化することで幹線道路網が整備され、ピジン語などの共通言語が普及し、地理的言語的制約が緩和された。マランガン彫像に用いられる意匠の分布域が二〇世紀以降に拡大したことは、宗主国によってもたらされた植民地的状況を現地島民が流用し、生きた証左であると解釈した。

二〇一六年度卒業論文題目

［日本史学専攻］

草壁皇統と女性天皇　百田奈津美
道長以降の摂関政治における王朝の人間関係について　阿部　友博
鎌倉期鶴岡八幡宮寺統制とその前提　野村　航平
中世における「垸飯」の意義の変遷について　永堀　沙織
南北朝期九州探題発給文書の検討
―斯波氏経・渋川義行を中心に―　柳　光洋
中世河原者についての一考察　古川　瑶子
蔵田五郎左衛門と越後蔵田一族の再検討　板垣真優子
後北条家家臣大道寺氏の研究　小林　大地
天正期九州における人質の実態　竹田　剛志
町触から見る京都三大大火　田中　夏織
日本の食生活―魚菜文庫を中心に―　福　祥子
浮世絵から知る―子どもと遊び―　木村　颯
田沼意次の経歴および政策から見えてくる後世への影響について　宗重　博之
林子平の思想―彼の著作を中心とした考察―　濱田　康平
井伊直弼の真意
―日米修好通商条約から安政の大獄まで―　山下　和大
組織としての新選組　中嶋　愛

小泉信三と教育　長谷坂大樹
近世前期関東における物価変動と商品流通　坂下　仁美
品川宿の飯盛女と吉原の遊女　大塚　里紗
近世・近代の元禄赤穂事件受容史　古川　瑶子
錦絵新聞が持つ報道媒体としての意義
―錦絵版『東京日日新聞』を中心に―　町村明日香
外国人の見た日本人―幕末・明治期を中心に見る日本人の容姿の変遷―　稲村　文香
明治期における歌舞伎劇場の近代化
―時代の変化を受け入れる歌舞伎文化―　武井早祐美
明治期・大正期の西洋料理書の変遷
―洋食普及の様子とは―　芹澤侑香里
近代における草津温泉の歴史的変容
―「日新館」滞在者の分析を中心に―　田山　周造
戦争の影響による『主婦之友』の変化　吉澤　亜希
戦後における千葉県市川市の発展　小池　眞葵
皇軍と戦争神経症―内村祐之「戦時神経症に関する綜説」による位置づけの再考―　足助　美月
戦場に行かなかった〝戦中派〟の戦後
―海軍兵学校七五期はいかに戦争を語るのか―　伊藤　絹子
「優生保護法」体制下における「女性障害者」のあり方の変容
―骨形成不全症の女性 安積遊歩の半生記から―　篠原　麻見

［東洋史学専攻］
一九二〇年代末、ソ連・コミンテルンの対外モンゴル政策
―モンゴル人民革命党第七回党大会の意義―　浅井　諒
崔承喜の東洋舞踊と東洋の文化創造　瀬尾愛里紗
朝鮮人の満州移動―一九二〇～三〇年代の南朝鮮と北満州におけるプッシュ・プル要因　分部　咲江
譚嗣同の死と幕末の志士
―梁啓超「譚嗣同伝」の再検討を中心に―　青山辰之介
村田孜郎の中国観
―東亜同文書院が与えた影響を中心に―　上田　常裕
満州事変前後における重光葵の対中国政策　西村　夏子
九世紀後ウマイヤ朝コルドバの殉教運動　井上優衣子
イスラームと性―「解釈」の観点からの考察―　大谷　智
現代エジプトにおける学校教員の家庭教師化問題
―教育史の視点から―　土肥　杏香
植民地期インドにおけるカースト制度の形成と社会構造の変容―被支配国側の利点について―　鳥海　菖太
一五世紀後半～一七世紀前半イスタンブルにおけるキュッリエについて―慈善的役割を中心に―　井手　千裕
一六世紀オスマン帝国支配下におけるハンガリー社会の変化　加藤　瞳
ヴェールをまとったムスリマの挑戦
―イスラームと現代性―　鹿野　智人
マラク・ヒフニー・ナースィフのフェミニズムに関する

考察―「ムスリマ固有」の言説構築を中心に―　實　絢子
オスマン帝国の鉄道とその軍事的性格―アナトリア・バグダード鉄道とヒジャーズ鉄道を中心に―　高橋　伸明
イスラームの塔「ミナレット」の変遷―現代日本で見られる類似的塔建築との比較―　中村　実里
中世シチリア王国における「未熟な医者」―史料『シチリア勅法集成』と『サレルノ養生訓』を用いた一考察―　長島理紗子
南アジアにおけるイスラーム化とスーフィズム―デリー・スルターン朝下のチシュティー教団を中心に―　長谷川実紗
ムハンマド・アブドゥフの改革思想　平川加奈子
一九世紀聖地メッカの住民とその生活―メッカに滞在したヨーロッパ人たちの視点から―　藤原　幸生
実業家としての山田寅次郎―東洋製紙での活動、晩年の活動を中心に―　森　雄大
オスマン帝国における宮廷ハレム―一六世紀後半・一七世紀前半の「女性の統治」―　山中　遥華

[西洋史学専攻]

イングランド七王国時代のキリスト教の意義　宇野恵利菜
中世南フランスにおける神の平和と騎士階級の形成　江元　泰智
イングランド人とノルマン人の同化―なぜイングランド人のアイデンティティは征服者に勝利したのか―　吉野　茉希
行政長官ヒューバート・ウォルターによるイングランド統治　須貝　孝志
中世イギリス農民の土地取引―荘園制度や農民の生活実態を中心に―　姜　だそる
キング・メーカーウォリック伯リチャード・ネヴィルとイングランドの統治体制　河野菜穂子
アルマダの海戦―勝者の歴史の中に隠れてしまったものは何か―　和田　拓海
初代インド総督ウォーレン・ヘースティングス―弾劾裁判とその影響―　神島　由衣
ブルゴーニュ公シャルル・ル・テメレールの外交政策とその意図―一四六八年を中心に―　清水　遼
日本統治下樺太の都市の形成とつながり―大泊と豊原を中心に―　小島　惣太
マクシミリアン一世期バイエルンにおける宗派化について　須藤　裕也
一八世紀イギリス風景式庭園の誕生　森山　優紀
職人による宗教画から芸術家による世俗画へ―中世から近世への架け橋となったイタリア・ルネサンス―　赤城　茉林
一六世紀スペイン領アメリカにおけるエンコミエンダ制の発生と展開　村上　浩介
ロミオとジュリエットの愛の差異と完結―シェイクスピア劇の男女愛―　河合　優香
「栄光ある孤立」の放棄と日英同盟―イギリス帝国外交の転換―　浦山佳緒里
アメリカン・ニューシネマの成立要因―一九六〇年代の

時代精神とハリウッド映画制作の変化―　笹川　恭平
ニューヨークタイムズから見る一九三六年ベルリンオリンピック　岩田　匡矢
戦後アメリカでのカウンターカルチャーにおける「ジーンズ」の役割について　國吉　広大
一八世紀スペイン・アンダルシア地方における人口動態史と家族史研究―その史料と方法論について―　土肥野秀尚
一九二〇～三〇年代のオリンピックとアメリカ人種主義への影響―黒人雑誌『クライシス』の分析を通して―　前野　良太
ブルボン王権下における世論の形成と発達―一八世紀初頭からフランス革命前夜にかけて―　田村　遥奈
第二次世界大戦におけるチェコの追従と抵抗―ラインハルト・ハイドリヒによる統治―　上岡　千尋
ナチ政権の教育政策―ヒトラー・ユーゲントの魅力と欠陥―　嶋崎真菜美
第三共和政期のフランスにおける王党派の衰退について　松浦　峻大

［民俗学考古学専攻］
イベントの消長に読み解く「ツチノコ」観　島村　允也
オホーツク文化における鰭脚類の利用―部位組成の比較から―　女部田かなみ
霧島連山周辺域における杓文字をもつ田の神像の地域性　川崎咲登子
文様の配置パターンから見るアイヌ衣服　北垣　文菜
現代日本人の歯の変異―慶應義塾大学文学部学生の歯型資料の検討―　西村　奈緒
羽口の様相から見る北海道擦文文化期における移動鍛冶　土方　康司
円筒印章における「闘争図」の描かれ方の変遷　高見　駿介
第三パレスチナにおけるビザンツからイスラムへの移行―出土コインを中心に―　大内　絢
プランタジネット朝におけるリチャード一世のライオンの意匠　黒沢　愛子
ジャマイカの「離散」黒人から始まる音楽文化―スカ、ロックステディ、レゲエの歌詞分析を通して―　伊藤　栞
フラの「伝統」と「革新」―ハワイ文化復興運動を背景に―　堀　いづみ
変遷する都市祭礼における「伝統」の考察―大阪府堺市百舌鳥八幡宮月見祭を事例に―　山根　宏斗
イースター島における「歴史」の観光資源化　吉田友里恵
埋蔵文化財と地域住民との関わり―南種子町広田遺跡の事例を通して―　石本のえる
後期旧石器時代原産地遺跡における石刃の使用―お仲間林遺跡と太郎水野2遺跡の分析から―　小谷部　優
城郭の構造から考える城塞的グスクの時代的変遷　菊池百合子
広島市の被爆建物の保存活動の評価　長瀬　健太